

# 『気候危機とアートのシンポジウム』のためのサウンドトラック

2024年7月27日

選曲とコメント：安永哲郎

## Stephen P. McGreevy “Soloar-Minimum VLF Expedition To Alberta 2 June 1996 4:15AM”

### 「Auroral Chorus II: Music Of The Magnetosphere」 (2000) より

初夏の早朝にカナダのアルバータ州で観測されたオーロラコーラス。電磁波の一種が起こす現象で、オーロラが発生する原因となる地磁気の嵐が超長波となって生み出す効果として、音楽に似た周波数変化が特徴です。口笛の音に似ているため「ホイッスラー」現象とも。

## Chris Watson “Low Pressure. Glen Cannich, Inverness-Shire, Scotland”

### 「Stepping Into The Dark」 (1996) より

Cabaret Voltaireの創設メンバーで、後に英BBCの音響技師に転身したクリス・ワトソンのライフワークであるフィールドレコーディング。人が足を踏み入れない土地での録音をテーマにした作品から、スコットランド、グレン・キャンニッチ峡谷で収録された低気圧の音。

## Jana Winderen “Untitled”

### 「Energy Field」 (2010) より

ノルウェーのヤナ・ヴィンランがフォーカスを当てるのは、水や氷の中から発せられる物理的にも聴覚的にも人間がアクセスしにくい環境音。深海での録音が可能なハイドロフォンマイクが捉える海流や流氷の摩擦音は、複雑に構成された電子音響オーケストラのようです。

## Michael Allen Z Prime “Armillaria Mellea II”

### 「Bioelectrical Music」 (2023) より

サウンド・エコロジストを名乗る英国の生態学者は、野生生物の環境保護への関わりをきっかけに自然物の活動電位を音に変換する作品を多く発表しています。この音源は人の神経系に幻覚作用をもたらすキノコ的一种に電極を刺し、その電気活動をトレースしたものです。

## 松本一哉 “踊る水面”

### 「水のかたち」（2015）より

打楽器奏者の松本一哉は、氷原や洞窟などの自然環境をコラボレーターに、日本各地を巡りながら演奏と録音を続けています。意図や作為を抑制し、自然が発する偶然の現象に向き合う時間から生まれる作品は、人間と自然を隔てるものとは何かを問いかけてくるようです。

## 坂本龍一 “Walker”

### 「async」（2017）より

日常や自然をインスピレーションに、「非同期」の「非音楽」を探究した音楽家の晩年の作品集から、落ち葉を踏みしめる足音を主旋律にした楽曲。森の情景を呼び起こす風景画のようでもあり、人と自然の接点である足裏の感覚を喚起する触覚的な作品でもあります。

## 鈴木昭男 “（磐笛）”

### 「神下山 高貴寺 ザ・ライブ 第11回 [Final] 百千万集落」（2002）より

大阪・河内の真言宗寺院を舞台に、土砂降りの中で上演された磐笛（岩笛）の演奏。自然現象によって形作られた天然の楽器として、縄文時代から使われていたという岩笛の素朴で霊妙な音色が、激しさを増す雨の境内に奉納される様子が記録されています。

## David Tudor “Rainforest Version One”

### 「Rainforest」（1998 / Mode Records盤）より

天井から吊り上げられ、それぞれに振動と発信を繰り返す無数のオブジェで構成されたライブ・エレクトロニクス作品。「人工の熱帯雨林が発する天然の電子音響」というパラドックスが生成する特異なアンビエンスが、本シンポジウムのテーマにどこかで共鳴するかなと。